

学院創立者来日百二十年の軌跡

若 山 晴 子

一九九三年三月は、神戸女学院の創立者たるミス イライザ タルカッタ (Miss Eliza Talcott, 1836-1911.) とミス ジュリア E・ダッドレー (Miss Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906.) が来日してよりちょうど百二十年。多少とも区切りの良い時に際会したのを機に、改めてその業績を通覧して見る必要を感じた。殊更に英雄伝として喧伝する必要はないが、逆に、先人の積み上げたものをないがしろにしたとして、それが無知の故であったとすれば、尚更に悲しい。



かくて史料室では、たつて願って大学の礼拝の一時をいただき、学院創立者来日百二十年を記念するプログラムを組むことを計画した。これは上の写真のように実現し、スライドを用い、いわゆる劇伴音楽もつけての試みとなった。ポスターは寺西裕加恵さんの手になるが、これが「公演」となったのは、上述の「試み」のせいである。そして、その事の展開の次第は、次頁以下に御覧いただくことにしよう。

タルカット、ダッドレー、両先生の来日百二十周年を迎えるにあたって

これはスライドを用いてたどる神戸女学院創立者の軌跡である。多種多様の資料スライドの中から使用に適したものを選ぶにつき、その選出の目安を各項冒頭に太字で示す。傍線のついたものは実際に演奏を流すことができれば一層効果的であろう。

ミス・タルカットの愛唱讃美歌、創立者両女史の写真、系図 神戸女学院。その創立は一八七五年に遡る。これを建てたのは二人のアメリカ人宣教師、ミス・イライザ・タルカットとミス・ジュリア・エリザベス・ダッドレーである。両女史の来日から百二十年を経た今、単なる懐古の情を超えてその事績に思いをいたし、さらなる歩みの糧とできるようにと願って、この一時を用いたい。

ベツレヘムの野、馬小屋、主の聖誕の教会 その昔、ユダヤのベツレヘムに神のひとり子が遣わされたと、聖書は告げる。自らの知力にたより力にまかせて罪に堕ち、創造主なる神のみ前に安らいを失なった人類の贖いのためであった。その贖い主が人の子の姿となり、みどり児となつてこの世に生まれ給うた時、近くの野に在った羊飼いたちにこのことを告げるべく現われた天使の言葉として、聖ルカが福音書に記した意味深い章句。―「みよ、全ての民に及ぶべき大いなる喜びの音信をあなた方に伝えよう。今日ダヴィデの町に、あなた方のために救い主がお生まれになった。これが、主・キリストである。」当時のその辺りとおぼしきところに、今、ひとつの教会が建ち、ここに紹介した光景が三面の絵となつて、祭壇の背景を飾っている。

十字架、復活、昇天 さて、そうして我らの中に住み給うた主・キリストは、その十字架上の死と復活とによつて救いのみ業を完成し、天の神のもとにお歸りになったが、その時主は弟子たちに命じて仰せになった。―「あなた方は、行つて全ての民を私の弟子とし、聖父と聖子と聖霊の名によつて洗礼を授け、私があなた方に命じたことを全て守るように教えなさい。」主のこのみ言葉にしたがつて、その時以来、多数の人々が幾世代にもわたつて、未だ主を知らぬ異邦の民のもとに、主の贖いの喜びを告げ、彼らを神の民として招くために、出かけて行つた。

フランシスコ・ハビエルの来日 かくて、日本へのキリスト教の伝来は、西暦一五四九年に遡る。ここに神のみ言葉は、イスパニヤ

王国ナバラ地方のハビエル城に生まれたフランシスコ・イエズス会と称せられる宣教修道会の発起人の一人によって、インド、東南アジアを経由して伝えられた。山口の、今は無きサビエル聖堂を飾っていたステンドグラスはその事績の美しい記念であった。

迫害・殉教絵図 その後、アフリカの南端をまわる長旅をものともせずに相ついでやって来た宣教師たちの活躍によって、極東の島の

国のキリスト教化はようやく進展するかに見えたが、日本の対キリスト教政策は、一五八七年のキリスト教禁令を皮切りに悪化して、一六〇〇年代に入ると禁教・迫害の一途をたどることになる。そして、七世代半に及ぶくれ切支丹の歴史が始まる。

黒船、切支丹禁制の高札 日本はその後、諸外国との一切の交渉に門を閉ざした。その眠りを醒ました「たった四隻の蒸気船」——い

杯上喜撰

わゆるペリーの黒船。すでに十九世紀の半ばである。あわてふためき動揺した揚句に日本が開国にふみきると、様々な人物・物品と共に、キリスト教も、また、やって来た。しかもこのたびは、四〇〇年前に渡来したカトリック教だけでなく、あの当時はまだ西欧に生まれて日も浅かったプロテスタントの各教団も遅れをとらなかつた。この国にはなお切支丹禁制の高札が、新たに、維新政府の手によって揚げられていたにも拘わらず…。この高札の撤去が公布されたのは、実に、ミス・タルカット、ミス・ダッドレーの米国出立に先立つこと僅か半月にすぎなかつた。そしてそれまでに、浦上で見つかった切支丹信徒の斬首・大量流刑・宣教師ギューリックの日本語教師市川榮之助の獄死…というような厳しい現実が展開していたのであつたが…。

大陸横断鉄道、横浜への道 ミス・タルカット、ミス・ダッドレーを日本へと送り出したアメリカの海外伝道団体は、ボストンに本

部を持ち、その名をアメリカン・ボード・オヴ・コミッシヨナーズ・フォー・フォリン・ミッシヨonz (American Board of Com-

missioners for Foreign Missions)

と書いた。我々が米国伝道会と訳してきた、**会衆派**の団体であつた。これが日本伝道開始を

決めたのは一八六九年のこと。この年五月にアメリカ大陸横断鉄道の開通したことが、発議者の力強い後楯であつた。―「今や我々は、太平洋岸まで一週間で到達します。そしてサンフランシスコで乗船する。すると、次の寄港地は横浜なのであります。」

グリーン夫妻 奇しくも同じ頃、スエズ運河も開通した。たしかに地球はハビエルの時代よりもはるかに狭くなった。しかしそれで

も、一八〇〇年代半ばの船では、太平洋を渡るのにはば一か月の日数を要した。そして、その船旅をものともせずにやって来た宣教師たち。米国伝道会の嚆矢は二六歳の気鋭D・C・グリーン師とその夫人であつた。

ヘボン博士 横浜にはすでに、ローマ字の書式で名高いヘボン博士をはじめとする長老派の人々が来日していたので、米国伝道会は関西に活動の現場を定め、まず神戸、それから大阪と京都に伝道の據点・ステーション（プレスクリプション）を設けた。

神戸の宣教師たち 当初相ついでやって来た男子宣教師は、一人を除いて、夫人同伴であったが、独身婦人宣教師の来日は、ミス・タルカット、ミス・ダッドレーの事例が初めてであった。その後次々に独身婦人宣教師が派遣され、神戸、大阪、京都に駐在して伝道活動と教育事業にあたることになるが、ミス・タルカットとミス・ダッドレーの来日当時、伝道区はまだ神戸のみで、二人は、のちに同志社の重鎮となるJ・D・デイヴィス師のもとに旅装を解き、活動の準備にとりかかった。そしてまず、小さな私塾を始めた。元町講義所 神戸では、市中に教会設立の準備が始まっている。その教会の前身は元町講義所。教会としては、一八七四年四月十九日、攝津第一基督公會の名のもとに、現在の神戸教会の原型ができた。

三田、九鬼隆義、学校設立の趣意書 宣教師たちはまた、中国、四国までも伝道の旅を展開しているが、ミス・タルカット、ミス・ダッドレーにとつて、まず最初に深い縁の生じた市外の土地は三田さんだであった。殊にミス・ダッドレーは、女史のクラスにやって来た九鬼旧三田藩主夫人の招きで三田を訪ね、土地の人々に深い感銘を与え、彼らからその子女の教育を頼まれたと伝えられる。このことが間もなく、初めの小さな私塾を正式の寄宿学校へと発展させる大きな力となったことは、間違いない。学校設立のための募金の趣意書の中には、旧三田藩主九鬼隆義氏の名が見える。九鬼氏の名の下に見える五百円という金額は、当時決して少ないものではなく、九鬼氏が中心になってこの據金は八百円に及び、米国伝道会にとつて「最も励ましとなるものの一つ」であったという。

最初の校舎、開校の広告 かくて私塾は、立派な校舎を持った「女學校」となる。正式開校は一八七五年十月十二日。現・神戸女学院の百年を超える歴史がここから始まった。学校内での仕事の分担は、ミス・タルカットが学校業務全搬をとりしきり、ミス・ダッドレーは寄宿部門の責任をとった上で手のあいた所で授業を手伝うということになった。開校は、その頃発刊されて間もなかった基督教週間新聞、七日に一度の発行という意味で「七一雜報」と名づけられた新聞紙上に広告されて、人目をひいている。

讚美歌、教材、写真 それでは、このあたりまでの学校生活の様子を伝えるものを、二、三、あげてみよう。まず、当時よく歌われた讚美歌。『新撰讚美歌』第二七番、現行の『讚美歌』第五〇二番にあたるものであるが、当時は英詞で歌っていたらしい。それ

から、テキストとして用いられたという小冊子『ピープ・オヴ・デイ(The Peep of Day)』。また、初期の生徒たちとミス・タルカット、ミス・ダッドレーの写真。寄宿舎内部の写真…。

『育幼艸』こよだぐさ なおこの頃、ミス・ダッドレーは子供のしつけに関する一冊の本を出版している。『育幼艸』と題されたこの小さな本は、ミス・ダッドレーが英文で書き、それを教える子の夫なる人に助けてもらって和訳したものという。さし絵つきである。

ミス・パロウズ 学校は、第三の婦人宣教師ミス・パロウズの来日もあって、まずは順調に進んでいた。しかし、この人々は、自分たちが、福音の光を知らぬ全ての人にその光をもたらそうと来日したことを思うと、学校という垣根の内に閉じこもっていることに満足ができなかった。ミス・ダッドレーは体をこわしたのを機に学校の仕事から手をひいて一般の婦人伝道に専心することになり、ミス・タルカットは、女史もまたそうしたいために、米国伝道会本部に対して学校の後継者派遣を要請していた。

ミス・クラークソン そしてついに一八七八年、ミス・クラークソンという若い婦人宣教師が着任した。もっとも、学校事業と伝道活動とを調和よく進めてゆくのはそう容易なことではなく、年齢が離れ経験の深さの違う人々の間の職務の分担・譲り渡しの手順は、しばしば行き違いと試行錯誤を免れなかったが、この多少とも混乱した時期に、学校はその日本語名を「神戸英和女学校」と定めたらしい。そして一八八〇年秋までに学校はすっかりミス・クラークソンに委ねられ、女史は積極的に教科内容の整備充実にとり組み、より高度な女子教育の場と方向を準備した。かくて、ミス・タルカット、ミス・ダッドレー、ミス・パロウズは学校を離れ、念願の一般伝道に専従できる身となった。ミス・ダッドレーとミス・パロウズは神戸の市中に在って広範の伝道に励むと同時に、伝道に携わる日本婦人の養成に盡瘁した。これはやがて神戸女子神学校となり、現在、聖和大学神学部の中にその伝統をとどめている。

岡山教会 一方ミス・タルカットは、成立したばかりで人員不足の岡山伝道区の救援のために転任してゆく。そして程なく、岡山教会設立の式に参列している。

第一回卒業式 とはいえ、ミス・タルカットと神戸英和女学校との縁は、なお切れてしまいはしなかった。ミス・クラークソンが過労に倒れ、帰米引退を余儀なくされるに至ったため、一時的ではあるが呼び戻されて、ちょうど来日していた妹のミス・マリア・タ

ルカットと共に神戸にやって来た。そして計らずも、神戸英和女学校第一回の卒業式を執り行なっているのである。

ミス・ブラウン、ミス・ソール　そして、ミス・クラークソンの後任としてミス・ブラウンとミス・ソールを迎えた上で、休暇帰米の途についた。旅は西まわりで、女史はインドの伝道活動に深い感銘を受けたという。

因みに、ミス・クラークソンは、帰米の際、ミス・ダッドレーの休暇帰米と行を共にし、次に同志社に赴任する再来日の旅を、休暇あけのミス・タルカットと共にすることになった。これも何かの縁であろうか。

音楽館、理科学館、スクエア・ピアノ　ミス・ダッドレー、ミス・タルカットは、それぞれ、休暇あけには元の現場で普段の活動を続けているが、神戸英和女学校は、新たにミス・ブラウンとミス・ソールの共同体制のもとで著しい発展を上げている。学校をカリッジにまで高めるためのたゆみない努力に並行して、音楽館、理科学館を建設し、優れた教師をもとめ、授業内容を更に豊かにしようと心をくだいている。近年話題になったスクエア・ピアノが学校に入ったのもこの頃のことらしい。

旧・正門と現・谷門　また、音楽館と理科学館の捧堂とはほぼ時を同じくして、神戸英和女学校は「神戸女学院」と改称した。その正門を飾った「いしぶみ」は、その後岡田山にキャンパスを移した折りに持参されて、現在は谷門の門柱となっている。

京都看病婦学校、野戦病院での活動　この間に、ミス・タルカットは京都に転任した。神戸でも岡山でも活動を共にしたベリー博士に招かれて、同志社の京都看病婦学校に赴任したのである。ここでの仕事は、学校におけるキリスト教教育と病人への慰問、それに近隣への伝道旅行が主であったが、日清戦争の折りは広島島の野戦病院の慰問と伝道に赴き、誠心誠意つくした。その思いやりの深さは、相手の傷病兵はもとより、端（はた）で見る者の心をも打ったということで、新聞・雑誌等への賞讃の寄稿が一つならず残っている。

しかしこの夏はコレラが大流行していて、女史自身も罹患し、賢明な養生によって全快したとはいっても、年齢のせいもあるうが、体力回復が思うにまかせず、帰米休養を勧告されることになる。そして、いざ帰ってみると、結果は容易に好転するものではなかったらしい。―休暇が長びくのは心苦しいが、これまでの「伝道団一強い女」という異名は今更回復すべくはないにしても、中途半端な状況で帰りたくはないので、養生につとめるつもり―とは、この頃のミス・タルカットの述懐である。

ハワイ日本人教会　ミス・タルカット三度目の来日はようやく一九〇二年の暮に実現したが、なおその日本帰任の途上、かつての同

僚O・H・ギューリック師の要請に依えてハワイに立ち寄り、この日本人教会のためにはば一年の奉仕をした。

ミス・ダッドレーの墓　そしてここに滞在中のある日、ミス・タルカットは、健康上の理由により引退帰米を決意して日本を離れたミス・ダッドレーと、生涯最後の会見の機会を持った。ミス・ダッドレーは帰米後、カルフォルニアに余生を送り、一九〇六年七月十二日、六五歳で永眠した。

神戸女子神学校、座古愛子姉、天幕伝道　日本に戻ったミス・タルカットは、ミス・ダッドレーに去られた神戸女子神学校のミス・パロウズのもとで、晩年の伝道活動に従事することになる。一九一〇年、亡くなる前年の、女子神学校における修養会の写真が残っている。座古愛子さんとの出会いもこの頃のことである。しかし女史の活動は神戸周辺のことにとどまらず、札幌の天幕伝道や、長逝の半年前にまで及ぶ宮崎伝道区への出張救援活動など、スケールの大きい働きには目を見はらせるものがある。

創立者記念日の歌、墓前礼拝　なお、神戸女学院では、時の院長ミス・ソールが、ミス・タルカットの誕生日を創立者記念日なる祝日と定め、ミス・タルカットの功績を記念することを慣例とした。この日のための歌も作られた。この祝いは、ミス・タルカット帰天以後は墓前礼拝となつて今日に至っている。

春日野墓地、修法ケ原　ミス・タルカットの帰天は一九一一年十一月一日。享年七五。その生涯の半ば以上を日本人のために捧げ、日本にその骨を埋めることになった女史の墓は、神戸春日野墓地にあったが、近年、神戸市の市策により修法ケ原に移された。

岡田山キャンパスの景観の数々　神戸女学院はその後、ミス・ソールからミス・デフォレストに引き継がれ、その時期にキャンパスは神戸山本通から西宮は岡田山に移転した。当時、英字新聞「ジャパン・アドヴァタイザー」は特集を組んでこの新キャンパスの景況を報じた。その後六十有余年、創立以来百十余年。今このキャンパスに立つて、院長室にミス・タルカットを、その同じ建物の塔屋にミス・ダッドレーを偲ぶことを誰が思い出すのだろうか。：ソール・チャペル、ベリー博士の記念樹なる大銀杏、デフォレスト館、オルチン館そしてまたタルカット館：と、このキャンパスには代々の宣教師方の事績が様々に記念され、残されている。創立百周年もすでに昔のこととなり、戦後の歴代院長もすでに六人を数えたが、この長い歴史の重みとそれを支えてきたたくさんの人、数々のもの、そして何よりもそれを守り給うた神のみ摂理を、心に刻んで思いめぐらすことを憶えつつ、歩んでゆきたいものである。